

インドネシア語母語話者による日本語自然談話における終助詞の使用実態

勝山彩 (早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

1. 研究の背景

日本人の会話における文末の約35%が終助詞である(メイナード 1993)とされることから、日本語会話において終助詞は極めて重要な位置を占めている。しかしながら、終助詞の習得は日本語学習者にとって決して容易なものではなく、終助詞を含む文末表現は「命題のみの表現に比べ、日本語学習者にとって習得が困難である」(市川・小川 1992)ことが報告されている。さらに、対人的な機能を有するとされる終助詞は「話し手と聞き手の関係を前提として使われ、誤った使い方によっては相手に不快な気持ちを起こさせかねない」(上野 1972)ことから、学習者によるコミュニケーションの場において早急に改善されるべき事項であろう。そこで本研究では、接触場面における日本語学習者の終助詞の使用実態について、仁田(1991)によるモダリティの概念を枠組みとし、「現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした言語事態に対する把握のし方、および、それらについての話し手の発話・伝達態度のあり方の表し分けに関する文法的表現」としての立場から考察する。学習者の母語としては、インドネシア語を採用する。これはインドネシア語の終助詞に相当するものは10種類¹と、日本語終助詞が12種(佐治 1957)と同等に種類が多い。これは、チューシー(2013)のタイ人日本語学習者の終助詞「ネ」の研究においても、学習者の母語に起因する正または負の転用の可能性について言及されているためである。以上のことを踏まえ、学習者が日本語会話中に使用する終助詞の実態を個々の用法面に着目し、使用実態の把握に対するアプローチを試みる。

2. 終助詞の定義

本研究における終助詞の定義は、日本語学研究事典(飛田他 2007)に記載の通り以下のものとし、類似の表現と区別する。

文末で用いられ、感動・希望・疑問・命令・禁止・念押しなどの意味を有する。係助詞の文末用法と重なる部分があるが、文中には用いられないため係助詞と区別される。(中略)文節の区切れに自由に現れる間投助詞と区別する。

3. 本研究の目標

自然会話は人為的操作がされておらず、話題や参加者の役割の制約が少ないとされる(近藤・小森 2012)故に、対人的機能を有する終助詞の観察にもっとも適切と判断した。そこで、本研究では自然会話をもとに、インドネシア語母語話者の終助詞の用法について以下の研究課題を明らかにすることを目的とする。

(1) 日本語自然会話においてインドネシア語母語話者が使用する終助詞の全体的な傾向はどのようなものか。

(2) 日本語自然会話においてインドネシア語母語話者が産出する終助詞「ね」「よ」「よね」²の

用法はどのようなものか。

以上の二点をもとに調査・分析を行ったものを、筆者の修士論文執筆の展望として研究発表を行う。

4. 調査の概要

4.1 調査方法

終助詞は打ち解けた場面での使用が多いとされることから、友人関係にある 20 歳代の大学生（インドネシア語母語話者 3 名と対応する日本語母語話者（東京方言話者）3 名）3 組を対象に、2016 年 8 月中旬に調査を実施する。学習者は、終助詞を含有するモダリティに対して、命題表現をある程度習得していることが望ましいとの観点から、「日常場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話」³を理解できる到達度である日本語能力試験 N2 の保持者とする。実際の使用場面に近づけるために、それぞれの組が普段もっとも会話を行うことが多い場所の選定を依頼し、20~30 分の自然会話の録音および録画を行う。

4.2 分析方法

まず、調査によって得られた会話データを鈴木香子（2007）の枠組みをもとに、文字起こしを行う。その上で、研究課題（1）に対し、文字化資料をもとに佐治（1957）の終助詞の分類を使用し、インドネシア語母語話者学習者が自然会話の接触場面においてどのような終助詞を使用するのかを明らかにすることで、学習者が使用した終助詞の全体的な傾向について考察する。研究課題（2）については、「ね」「よ」「よね」の用法に関してそれぞれ宮崎他（2002）、山田（2006）、劉（2010）のものを使用してコーディングを行う。これにより、インドネシア語母語話者学習者が日本語終助詞「ね」「よ」「よね」のうちどの用法を習得しており、またはしていないのかについて考察する。以上を行う上で、終助詞の「誤用」「非用」に関する分析も視野に入れて行う。

「ね」「よ」「よね」の用法の分析に使用する枠組みは以下の通りである。

「ね」の用法（宮崎他 2002）

確認要求	聞き手の知識との一致を問う。
同意要求	聞き手の意向との一致を問う。
同意表明	聞き手の意向との一致を示す。
行動宣言	聞き手の認識との一致を促す。
自己確認	自分の結論との一致を示す。
回想	自分の記憶との一致を示す。
拒絶表明	自分の決心との一致を示す。

「よ」の用法（山田 2006）

注意喚起	聞き手に注意を喚起し、認識させる。
認識要求	聞き手に自らの発話内容を認識させる。
修正要求	聞き手の情報に反論し、修正させる。

「よね」の用法（劉 2010）

同意要求	聞き手に同感や同意を求める。
同意表明	聞き手が持つ認識に対する同感や同意を示す。

5. 研究の展望

本研究は、筆者の修士論文の展望に関する発表であり、以下の点において更なる展望を検討している。今後はこれらの点に関する改善が望まれるであろう。

1. インドネシア語母語話者の「傾向」として言及するには会話資料の絶対量が不足している。より多くの調査協力者による会話資料を取得すべきである。
2. 学習者の終助詞の使用実態を論じるためには、日本語母語話者のプロトタイプ的な終助詞の使用実態も同様に把握される必要がある。よって、同じ条件化での日本語母語話者同士の会話に関する調査も必要であると考えられる。
3. 学習者の終助詞使用の問題点を母語からの転移について考察するために、類型論としてインドネシア語終助詞が誤用に与える影響に関しても視野に入れる。
4. 会話資料の用法の分析、特に誤用分析判定に関して、筆者のみの判断ではなく他の日本語母語話者（会話当事者や非会話当事者）による判定も必要となる。

これらを踏まえた上で、本研究の日本語教育への貢献として以下のものが期待される。

- ① 客観的な基準を用いて指導される場合が多い教室や教科書では扱いきれないと考えられるモダリティのうち終助詞に関して、指導における基礎研究となること。
- ② 中でもインドネシア語母語話者日本語学習者による自然会話中における終助詞使用に関する初の研究となること。
- ③ これまでは会話中に産出された終助詞の分析は調査者本人によるものが多かったが、会話当事者や第3者からの視点も含めた分析を行うこと。

今後は上記の展望およびポスター発表により得られた知見をもとに、日本語学習者の終助詞使用に関する使用実態のみならず、問題点やその原因についても明らかにするために更なる検討を重ねていきたい。

注1：Wouk (1999)および Kridalaksana (1989)のそれぞれ「pragmatic particle」、「phatic particle」とされるもののうち、文末に使用されるものを日本語の終助詞に相当するものとして選別した。

注2：パイロット調査により、インドネシア語母語話者日本語学習者がもっとも多く使用する日本語終助詞は「ね」「よ」であり、50%以上を占めていることが明らかになったことからこの二つに焦点化する。また、このことより「ね」「よ」の複合終助詞である「よね」との関連性を探ることも考慮に入れる。

注3：日本語能力試験公式ウェブサイトの「N1~N5：認定の目安」による。

【参考文献】

- 市川保子・小川恵子 (1992) 「既習力診断テストのための文法マップの一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』7、pp.155-175
- 上野田鶴子 (1972) 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17、pp.62-77
- 近藤安月子・小森和子 (編集) (2012) (「7 談話分析・会話分析」) 『研究社 日本語教育事典』研究社
- 佐治圭三 (1957) 「終助詞の機能」『国語国文』26-7、pp.461-469
- 鈴木香子 (2007) 「機能文型に基づく相談の談話の構造分析」早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位申請論文
- チューシー・アサダーユット (2013) 「タイ人日本語学習者の独話における助詞「ネ」の機能の研究」早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位申請論文
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語能力試験公式ウェブサイト、「N1~N5：認定の目安」 <<http://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>>
- 飛田良文 (編集主幹)、遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 (編集) (2007) (「9 文法」) 『日本語学研究事典』明治書院
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- メイナード、K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 劉雅静 (2010) 「談話における単独の「だよね」の用法—終助詞「よね」の機能に対する検討を兼ねて—」『筑波応用言語学研究』17、pp.71-84
- 山田京子 (2006) 「中国語母語話者の終助詞「よ」の運用に関する問題点—「よ」と対応する中国語表現との対象研究から—」『早稲田大学日本語教育研究』8、pp.123-135
- Kridalaksana, Harimurti. (1989) *Introduction to Word Formation and Word Classes in Indonesian*, Fakultas Sastra, Universitas Indonesia
- Wouk, Fay. (1999) Gender and the use of pragmatic particles in Indonesian, *Journal of Sociolinguistics*, 3/2, pp.194-219